

であい



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

HIECCの多文化共生促進事業

さっぽろ留学生日記

象と未来の子どものために アジアゾウ絶滅危機を 救いたい



サラダ パウデルさん
ネパール連邦民主共和国
北海道大学大学院獣医学研究科
野生動物学研究室

魅力満載の国、ネパール

「ネパールは小国ですけど、魅力がたくさん詰まった国です」と語るサラダさん。この国の名前を聞いて多くの人はヒマラヤ山脈を思い浮かべるだろうが、サラダさんはネパール南部のプトワル出身。「南部の国立公園には象に乗りながら野生のサイヤトラを間近に見られる場所もありますよ」と。

日本で研究を続けたかった

研究テーマは「ネパールでのアジアゾウの結核症疫学調査」。ネパールで獣医学を専攻し、その後は野生動物の研究を継続したかったが、自国には研究室がなかった。そんな時、日本に留学した仲間の話が印象的で、日本で研究ができないか調べたところ、現在の留学先に辿り着いた。「野生動物を研究するなら欧米諸国という選択肢もあったが、英語以外の言葉が話されている国に行きたかった。北大に来ていなかったら、研究を続けていなかったかもしれません」。

なぜ象の結核を研究？

「小さい頃から牛やヤギなどの動物が大好きでした。特にヤギの赤ちゃんはとってもかわいいですよ」と目を細めるサ

ラドさん。では、なぜ象の研究？「大学の研究で国立公園に行ったときに、象のことが大好きになりました。象はとっても知的な動物で、こちら側が愛情を持って接すると、象も自分のことを大切にしてくれます」。では、どうして結核なのか。「ネパールだけではなく、インド、タイなどのアジアゾウ全般に結核は見られ、きちんと治療していない国もあります。そのまま放置したら、アジアゾウが絶滅してしまうかもしれないし、将来の子どもたちは、本や写真でしか象を見られなくなってしまうかもしれないのです」。サラダさんの思いやりと優しさが伝わってくる一言だった。

雪はとっても新鮮！

札幌に住んで2年半。年中暑い地域の出身なので札幌の四季や雪が新鮮に感じたそう。また、研究室の仲間や先生が手助けしてくれ、「生活で困ったことはあまりないですよ」。「帰国後も北大の仲間や指導教官と連携しながら、象の環境改善のために研究を続けます」と語る。サラダさんの象への深い愛情と熱意がアジアゾウを取り巻く課題を解決し、未来の子どもたちもきっと本物の象を見て心をとぎめかすのだろう。



お祭り用メイクをしたかわいい象さんと

在北海道外国公館・通商事務所等協議会「学校訪問事業」のご案内

在北海道外国公館・通商事務所等協議会では、北海道に所在する各国総領事／領事が、道内の中学校・高校に赴き、自国の情報や日本とのつながり、総領事館の業務などについてお話をする「学校訪問事業」を実施しています。

総領事／領事の派遣に係る移動交通費等の経費は原則不要ですので、学校関係者の皆さまはぜひ積極的にご活用ください。

「学校訪問事業」の概要

- 対象学校等**
北海道内公立中学校及び高等学校(札幌市内は小学校も対象)
- 講演内容(例)**
 - ①自国についての特徴的な情報
 - ②総領事館／領事館の機能、および総領事／領事の仕事について
 - ③学校側からのリクエストによる事項
 - ④学校側(生徒)からの発表、報告など
- 派遣可能公館**
在札幌大韓民国総領事館、在札幌アメリカ合衆国総領事館、在札幌ロシア連邦総領事館、在札幌中華人民共和国総領事館、在札幌オーストラリア領事館
- 申込方法**
下記事務局へお問い合わせください(各総領事館／領事館に直接お申込みできませんのでご注意ください)

お問い合わせ先 在北海道外国公館・通商事務所等協議会事務局 ((公社) 北海道国際交流・協力総合センター 交流・協力部内)
TEL: 011-221-7840 FAX: 011-221-7845



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日: 2014年6月5日
TEL. 011(221)7840 FAX. 011(221)7845 http://www.hiecc.or.jp
E-mail: intc@hiecc.or.jp(交流・協力部)
印刷: 岩橋印刷株式会社

グローバル化が著しく進展するに伴い、北海道においても外国人居住者が地域社会を構成する一員となりつつある昨今。こうした状況を踏まえ、道民と外国人居住者が互いの文化や生活習慣などを相互に理解・尊重し、ともに地域の発展・活性化に貢献することができる多文化共生社会の実現が求められている。

そのようなことから、HIECCでは、国際交流、国際協力に加え、外国人を地域の一員として認識し、外国人も暮らしやすい地域づくりを推進する様々な「多文化共生促進事業」を道内関係団体等と連携・協働し、ここ数年取組んできたが、今回は直近で行われた2つの事業を紹介する。



菊池氏による講演

【多文化共生ワークショップ】《平成26年2月23日(日)／共催：札幌国際プラザ》



HUGを体験する参加者

(公財)札幌国際プラザや(特活)多文化共生マネージャー全国協議会と共催し、道内自治体をはじめ、国際交流団体、NPOなどの関係団体とともに、北海道の多文化共生を協働で進めるにあたり、ワークショップを毎年開催している。

このワークショップは平成22年度から開催しており、当初は、まず多文化共生の活動をしている団体同士の顔の見える関係づくりや、外国人を取巻く環境などについて知ることからスタート。東日本大震災以降は、災害時に外国人が直面する課題や外国人支援などについて、講師を招いて全国各地の取組みなどの情報の共有を図ってきた。

平成25年度は「災害時対応」をテーマに開催。講師には菊池哲佳氏(公益財団法人仙台国際交流協会／企画事業課主任)を迎え、東日本大震災発生時に多言語支援センターを立ち上げ運営した経験から、多言語防災、災害時の担い手の連携などについてお話していただいた。

また、災害時における避難所の運営をゲーム感覚で体験する「避難所運営ゲーム／HUG」を北海道大学大学院工学研究院の森准教授の進行のもと実施。HUGは、静岡県が考案したゲームで、避難所において次々と身を寄せてくる様々な事情を抱えた住民(カードに記載)をどのように配置していくかを緊迫感をもってリアルに体験することができるもの。カードの配置にあたっては、配慮すべきことや解決すべき問題が、その過程で分かり、参加者同士で意見を交わしながらゲームを進めていた。

【多文化共生コーディネーター(事業担当者)研修会】《平成26年3月20日(木)／協力：旭川市》



志渡澤氏による講演

道内各地で国際交流や多文化共生を担当している事業担当者(コーディネーター)を対象に、在住外国人と共に地域活性化を支える取組みについて学び、事業担当者に今後の地域づくりについて考えてもらうことを目的に平成24年度より実施している事業。この度は旭川市の協力を得て、旭川市国際交流センターで実施した。

昨年度に引き続き、(特活)多文化共生マネージャー全国協議会監事の志渡澤祥宏氏を講師に迎えるとともに、山形の農村に花嫁として韓国から嫁ぎ、現在は「ウメちゃんキムチ本舗」を経営する、通称「ウメちゃん」で親しまれている金梅永氏(日本名:阿部梅子)をお招きし、在住外国人からの視点でいろいろとお話をいただいた。

まず、志渡澤氏より、多文化共生の概念や、なぜ地域で多文化共生が必要なのか、また、全国の多文化共生を推進する事例などを紹介。また、志渡澤氏の進行により、対話形式で「ウメちゃん」のお話をお聞きした。ウメちゃんは「日本に来た頃は日本語もよく解らず寂しい思いもしたけれど、主人に支えてもらい、日本での生活を送っていました。ある日、キムチを作って近所に配ったところ大変評判が良く、販売したところ反響がありました」と。そして、現在のビジネスに結びついたそう。

また、事業が拡大する中で、自分と同じ境遇で地域に住む外国人も積極的に採用するとともに、地域一体となってビジネスもどんどん拡大し、自治体も巻き込みながら地域を活性化させた体験を語っていた。

その後、参加者同士グループでディスカッションを行い、地域を活性化させるためにはどのようなことに視点を置く必要があるか、また志渡澤氏やウメちゃんの話から得たポイントを今後のどのように事業に反映するかなどを模索していた。



ウメちゃんによる発表



ネパールでの経験を活かしながら地域の良さを引き出したい

小西晴香さん(遠別町地域おこし協力隊)

私は2012年から2年間、ネパールで野菜栽培隊員として活動してきました。私が赴任したバクタプール郡は首都カトマンズ近郊の都市でしたが、古い街並みや農村の風景が広がる穏やかで大変住みやすい街でした。私はここで、農家を訪れて畑仕事を手伝いながら、野菜の栽培管理についてアドバイスをしたり、日本品種の柿やナンの販路開拓、農業や化学肥料の使用方法に関する研修会等を行いました。1年目は、言葉の問題により意思疎通があまりうまくいかない、また自分にできることをなかなか見つけられないなど、活動は順調とは言えませんでした。しかし現地の人々や他の隊員と共に活動する姿勢を大切にすることで、徐々に活動の幅が広がり、2年目はあっという間に過ぎていき、最後は帰国したくないと思うほどになっていました。

ネパールは電気や水も少なく、インフラもまだまだ整備されていません。そのため赴任当初は不便さを感じることも

多々ありました。しかし、いつも私に「ご飯食べにおいで」と声をかけてくれる、家族を大事にする、よく笑うネパールの人々と関わる中で、不便さ以上に小さなことにも喜びや幸せを日々感じることができました。ネパールで活動した2年間は私にとってかけがえのないものとなり、今後の人生の強みにもなっていくと思います。

帰国した現在は、北海道の遠別町で地域おこし協力隊として働いています。主には地域に入り込んで、人手を必要とする農家に出向いて共に農作業を行ったり、地域のイベントを積極的に手伝ったりしています。ネパールでの協力隊の経験を活かしつつ、町民の方々とじっくり関わり合いながら地域の良さを引き出せるような働きをしていきたいです。

青年海外協力隊 平成23年度3次隊
職種：野菜栽培
派遣国：ネパール



キャンディーの加工方法を学ぶ村の女性たちと(2列目左から3番目が小西さん)

留寿都中学校2年生

札幌で中国総領事館とオーストラリア領事館を訪問

5月8日 木曜日
札幌市内

留寿都村立留寿都中学校(廣澤信弘校長)が取り組む「国際理解」の一環として、宿泊研修で札幌を訪れた2学年の生徒14名が、2グループに分かれて札幌中華人民共和国総領事館と在札幌オーストラリア領事館を訪れた。

中国総領事館では、この日対応していただいた李清領事から、総領事館の機能や普段の業務について説明が行われた。同領事は、「総領事館には様々な領事事務(自国民保護、ビザの発給など)があり、それらもちろん大切な仕事であるが、日本と友好親善を深めることも大切な業務の一つです」と述べられ、留寿都中学校の生徒が総領事館を訪れたことを心から歓迎した。



お土産を手に全員で記念撮影



ブレイジア領事の回答を懸命にメモする生徒たち

訪問した生徒7名も、予め自分たちで準備した様々な質問を尋ねた。「中国ではPM2.5が深刻な状況となっているが、どのような対策を講じているか?」、「中国国内で共通して食べられる料理は?」、「実際に日本に来て驚かれたことは?」などと質問し、李清領事からは、全ての質問に対し、丁寧に分かりやすい説明をいただいた。

また、総領事館の施設見学も用意されており、生徒は、普段、なかなか目にするのでできない総領事館の様子に興味深く見学していた。

一方、オーストラリア領事館を訪れた7名は、「絶滅危惧種の動物を保護するために国が行っていることは?」、「どうしてアボリジニーの言語は減ってしまったの?」など、自然環境や動物、また先住民に関することなどを中心に、少し緊張しながらイアン・ブレイジア領事へ質問。地図や写真などを使いながら、ブレイジア領事が流暢な日本語でわかりやすく回答した。また、写真を見せながらアリや蛾の幼虫が食べられる話題になると、生徒たちが驚きの表情と共に、「えー!」と声を発する場面も見られた。

両館を訪問した生徒たちは、最後に全員笑顔でそれぞれの領事と一緒に記念撮影をし、生徒の代表が「パソコンや本にはないことを知ることができました」とお礼を述べていた。

なお、このプログラムは在北海道外国公館・通商事務所等協議会が実施する「学校訪問事業」として、通常は要請のあった学校に総領事等が直接訪問するが、今回は生徒たちが公館を訪れる形で実施された。



李領事の案内で総領事館内を見学

国際NGOプラン・ジャパン映画上映会

「GIRL RISING～私が決める、私の未来～」札幌で開催

(4月19日 土曜日 札幌市教育文化会館)



来場者で埋め尽くされた会場

「GIRL RISING～私が決める、私の未来～」は2013年にアメリカで制作された9か国の女の子が登場する実話に基づくオムニバス映画。昨年10月11日に開催された「第2回国際ガールズ・デー」で一部上映され、全編視聴を希望する声が多くあり、今回は北海道で初上映。会場は満員の市民で埋め尽くされていた。

開始前にプラン・ジャパンのスタッフから「Because I am a Girl」キャンペーンについての説明があった。プラン・ジャパンは多方面からアプローチし地域開発を行ってきたが、その76年間の活動の中で一つ気付いたことがある。それは、男女のスタートラインが違うこと。「女の子」であるから教育を受けられなかったり、早く結婚させられたり、また生まれてくることさえ望まれないことも。「男女の差別なく一緒に同じスタートラインに立てるように」と、このキャンペーンに力を入れてきた。

さらにスタッフの方は言葉に力をこめて、「女の子を支援することで確信を得たことがあります」と。「女の子が貧困のサイクルを止

める「カギ」を握っている。教育を受けた女性がいることで、家庭の収入があがり、文字が読めることで家族の健康も守ることもできるのです。

映画では、カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタンの女の子が登場。画面の中の女の子たちは、貧困や震災、性的嫌がらせなどの厳しい環境にあっても、逃げずに立ち向かい、そして負けずに立ち上がっていた。その彼女たち一人ひとりの努力によって、何かが変わっていく可能性が画面から伝わってきて、見る側を逆に勇気づける内容となっていた。最後の少女の一言、「I am Change」という力強い言葉の響きは、今でも多くの人の耳に残っているのではないだろうか。



ハイチの少女がしていた「水汲み」体験コーナー

公益財団法人プラン・ジャパン

プラン・ジャパンは国連に公認・登録された国際NGOプランの一角。アジア・アフリカ・中南米の50ヵ国で、学校建設、予防接種、職業訓練など、子どもたちの能力と可能性を育む地域開発活動を行っている。(プラン・ジャパン「GIRL RISING」パンフレットより抜粋)

北海道ユニセフ協会20周年記念事業

「地球のステージ」(4月20日 日曜日 ホテルライブオート札幌)

平成6年2月に北海道ユニセフ協会北海道支部が結成されてから20周年。その佳節を祝う第2弾講演会～開発途上国の子どもたちの生活と東日本大震災の状況について～が開催された。(主催：北海道ユニセフ協会、共催：生活協同組合コープさっぽろ)

講演は特定非営利活動法人「地球のステージ」代表理事・精神科医の桑山紀彦氏による、「語りと曲で構成していく映像と音楽のシンクロ」。会場は桑山氏が作りだす幻想的な映像と語りの世界へと引き込まれていった。

ステージは、フィリピン、東ティモール、ブータン、そして東日本大震災後の東北の状況の内容で構成。「航空券が安かったから」という理由で行ったフィリピンは、活動の原点となった場所。物乞いの少女に風船を渡したことから物語が始まり、彼女の家族との出会い、手元にあった目薬を渡すことでできた人助け、そして過酷な状況でも笑い声が絶えないフィリピンの子どものたくましさや創造性が、美しい映像と共に語られていた。「名前などの固有名詞との出会いがあって、世界を身近に感じるようになった」という言葉が印象的だった。

また、宮城県名取市にクリニックを構える桑山氏が、震災後に地元の4人の子どもたちと撮影した映画『ふしぎな石』の一部を紹介。「被災したことを文化にしたい。「死」に向き合うことで、生きてきた意味をつかむことができる」という思いで制作されたその映画には、津波で息子を亡くした女性も出演。その方が紡ぐ「命の言葉」の場面が流れると、多くの聴衆は涙をこらえきれずにいた。最後に「震災のことは忘れても構わない。でも、津波で学んだ「生命の大切さ」は忘れないでほしい」と静かに語った言葉には、桑山氏の強い気持ちが込められているようだった。



会場はほぼ満席に



映像、音楽、語りで作出す幻想的な世界